

---

Tear's Kissing ~ 湮滅のセレナーデ ~

森野 蜻蛉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Tear's Kissing 湮滅のセレナーデ

### 【Nコード】

N2639C

### 【作者名】

森野 蜻蛉

### 【あらすじ】

「『帳』落つる時、愛は消え、世界は滅ぶ。」・・・魔法界が染まる死の静寂。それに立ち向かう少年達は、何を見て、何を愛すのか？

## 前話　夢か現の鎮魂歌

少女は言う、この世は全て穢れていると。

闇に満ち、神はその存在意義さえ失い、後に残るのは全てが墮落した人型の『何か』だけ、そんな世界が。なにもかも信じられないよ、と嘆く彼女の頬には、ひとつだけつつ、と流れる雫。

それ以上でも無く、  
それ以下でも無く。

唯、言葉にしきれない分だけの哀しみを全て込めて、たった、ひと雫。

器、と少女は言った。

キミは私の涙を容れるに足る、綺麗な器なんだよと。

少女の念う『綺麗』が何なのか、それをその瞳の深淵から読み取るには、自分の精神は脆弱過ぎて。

綺麗だ、と反対に思ってしまった。

周辺はインク壺の中のようなオニクスブラック。

自分と少女は、光の無いはずの世界に色彩を伴い浮かび上がった、何故か、寄り添い合っていた。

・・・思い出したように、組んだ手指の柔らかな温もりを感じた。それなのに、少女の軀は今まで触れた何物よりも冷たく。

どうして、と言う心の声を聴いてか聴かずか、より多くの温かさを欲し、少女は強く擦り寄って来た。

ポタリ、

・・・そんな音が聞こえて、堰を切ったような泪と嗚咽が肩を濡ら

した。

周りに人は無く。  
光照らす事無く。

たった二人だけ。

そんな、そんな情景が、夢とも現とも知れぬ闇に、唯確かに、存在していた。

『「帳」落つる時、愛は消え、世界は滅ぶ。』

・・・二人にしか聞こえない小夜曲<sup>セレナーデ</sup>。

僕は君に捧げよう、

最後の、一曲を。

## Five years ago 〱 惑うセレナーデ

V・G (幻想年代) 1875、  
セントラル・ユーロピア西部、  
貴族統治都市：セレブライタ。

黄昏。

神々が滅びることを指す単語で呼ばれるこの時に、地平線は未だ残る陽光を孕んで神々しく輝いていた。

既に唯一の明星だけが漆黒の天球を支配する時は過ぎ、そこにはまさに、満天と言うべき星空が在る。

その中にしんみりと染み渡るのは、静寂……ではなく、ただただ透き通ったバイオリンの美しい音色。

流れるような旋律、それに清純な響きが重なり、互いが互いを高め合うように調和している。

<sup>セレナーデ</sup>小夜曲。……昔々、愛する女性に男性が窓の外から聞かせていたという、甘く美しいリズム。

中世ヨーロッパ風建築の二階、そのベランダに、果たしてそのバイオリンは有った。……一人の少年と共に。

貴族の執事パトラーのような漆黒のスーツ、腕には大粒のターコイズが嵌められた銀のブレスレット、真っ白な手袋を嵌め、その手でバイオリンを器用に弾いていた。

頭髪は黒、瞳も黒。……つまり、黄色人種。

少年はその幼い体躯をゆったりと傾けながら、静かに弓を上下させていた。彼が集中して奏でる曲、それは甘く、そして酷く美しいのに、聞くものは誰ひとり、見受けられない。そんな中、孤独を一片たりとも見せない様子で、少年は奏でていた。

ふと、旋律が途切れる。

その代わりか、少年の背後からゆっくりした拍手が。

「・・・聴いてたんですね、お嬢様」

13歳という幼さ故の未熟な敬語が、ボーイソプラノとして聞こえた。

「お嬢様じゃ無くて、アレクサと呼んでください・・・って言っただけですよ？」そう答えるのは、同じ年頃の少女の声。幾分か大人し目な、優しい声。

少年は微笑み、少女・・・アレクサを見た。

色白で、ふさふさした亜麻色の髪をかわいらしく結い上げていて、真っ白な部屋着を、いかにもお嬢様らしくぴっちりと着こなしている少女は、ライトブルーの双眸を真っ直ぐに少年へと向けていた。声は優しくても、その眼光は、やや、鋭い。

「申し訳ないです、・・・アレクサ」

「解ればいいんです」

アレクサの目付きが、普段通りの優しいものに戻った。

少年の名はアキラ。父親がここの召使をしている関係で、貴族の息女であるアレクサ専属のお手伝いとなっている。アレクサに持ち込みを認めてもらったバイオリンで、アレクサの入浴中のみ練習をするという日課を続けていたのだ。

アレクサが歩み寄ってきて、ベランダの縁に腰掛けた。

「危ないですアレクサ」と慌てるアキラをよそに、「もう一度、お願いします」とにつこり笑顔で要求する。

いつでも温かい気持ちにさせてくれる笑顔を前にして、アキラは断るに断れなくなった。（そんな可愛い笑顔で頼まなくても・・・）などと考えつつ、アキラは弓を弦に引っ掛ける。

一瞬の静寂。

アキラが最初の音を弾き始めた・・・それと、同時に。

星空が消えた。

『え!?!』

轟、という音。それを響かすのは、風なんて生温いものではない。  
・幼い二人でも解るほどの、大きな力の奔流。いや、それは力な  
どと言う漠然としたものではなく、この世界で使われているすべて  
技能の根源、所謂『魔力』と言うべきだろう、それが異質化して、  
荒れ狂う龍神の如く流れていたのだ。

布を裂くような耳障りな音を轟音の中に織り交ぜながら、樹が、家  
が、倒されるのでは無く剥がされてゆく。そして上空、星空を消し  
去った物・・・漆黒のカーテンがはためいていた。

「『帳』・・・!?!」

それを見たアレクサが驚嘆の声を上げるが先か、紫色の波動がカー  
テンから飛び出した。

風を切る一条の暗い光。

幾つも幾つも放たれたそれは次々と地面に突き立ち、轟音と石の飛  
沫を上げる。最後の一本。

みるみるうちに、それとアレクサの距離が縮められて & a m p ; #  
8 7 2 2 ; & a m p ; # 8 7 2 2 ; & a m p ; # 8 7 2 2 ; & a m  
p ; # 8 7 2 2 ; & a m p ; # 8 7 2 2 ; & a m p ; # 8 7 2 2 ;

エリアシールド  
『空間結界!』

主人を護るが下僕の務め、アキラはブレスレットのある右手を突き  
出し、結界魔法を発動した。

ヴワ、という特徴的な効果音と共にターコイズが編み目状の碧い光  
を放ち、アレクサに向かっていた紫色の波動と相殺。そうこうして  
いるうちに、カーテンから湧き出してくるかのよう、有翼の色黒生  
物・・・要するに『DEVIL』とか『DAEMON』とかに分類  
される人類型生物が現れて来た。

「お嬢様、このままでは危険です！・・・下へ！」

アキラがアレクサの右腕を掴んで引き起こし、抱き寄せた。どさくさに紛れて・・・なんて余裕などかましてはいない。上空から焰が落ちて来たのだ、アレクサに向かって。

直上には、やや細身で、翼が二対の『DEVIL』がいた。その全身には、紅い魔法陣が燦然と輝いている。

「・・・焰属性の無詠唱型！？」

それは、上位DEVILの証。単体でも街一つなど数分で消せるような強者。

アキラははつとして、自分の腕の中の少女を見た。

DEVILもDEEMONも、人類の魔力を糧とする。だから、遺傳的に魔法の天才で、魔力が豊富な貴族に、引き寄せられてしまうのだ。

(& amp ; # 8 7 2 2 ; & amp ; # 8 7 2 2 ; & amp ; # 8 7 2 2 ; & amp ; # 8 7 2 2 ; & amp ; # 8 7 2 2 ; & amp ; # 8 7 2 2 ; 逃がさないと！) 流れるような動きで印を切った右手をDEVILに向け、呪文を詠唱した。

『放て、汝は雨の槍！』

ターコイズに魔力が光として収束、その輝きがアイスブルーに変わり、DEVILに向かって放たれた。

アクオスピア  
水槍。

省略してもよい呪文を詠唱することによって強化された槍が、DEVILの胸に突き立った。

地を轟かす雄叫び。

あんな攻撃で倒せるような雑魚であるわけが無く、アキラは閉じていたベランダの扉を蹴破り、階段を駆け降りた。

アキラは初めから、玄関から逃げようなどと不粋な事は考えていなかった。

・・・きつと、逃げようなど無くなっているから。

大理石のはずなのに真っ赤な1階の床を見ようとせすに通りすぎ、地下のワインセラーへと入る。



勢い良く扉を閉めた後、それに右手を当てた。

『汝、荘厳な壁とならん』

隠蔽結界。

ターコイズと同じ碧にドアが光った後、白い線で描かれた複雑な幾何学文様が浮かび上がり、描かれた文字や図形が、ゆっくりと循環を始めた。

「当面はこれでよし、と」

ふう、と安堵の溜め息をついた。

2人の目の前には、柔らかな光に照らされた木製のラックと、年代ものの赤ワインの壺が整然と並んでいた。

「みんな、死んでましたね」

アレクサが沈んだ声で言った。

「お父様とお母様、専属のガードから他の召使の人達まで……」  
酷く悲しそうな口調なのに、彼女は泣いていなかった。

「泣かないのですか？」

聞かずにはいられなくなつて尋ねたアキラに、痛々しい微笑みを返すアレクサ。

「……泣いたところで、誰かが戻ってくるわけじゃ無いですから。今、ここで生きてるのは、私達だけなんですから……」

「……」

お嬢様は強いな、そうアキラは思った。普通の女の子なら、身近な人達が全員殺されていると知っただけで、半狂乱になってしまうだろうに、と。

ワインセラーの奥の壁には、二本の槍と紋様付きの盾、そして古代ルーンが書かれたリボンを組み合わせた家紋のインテリアがある。アキラはつかつかとそこまで歩いて行き、楯の紋様、その中央のポタンを押し込んだ。

カチリ、カタ、コトン、と一続きの音がした後、その区画が回転を始めた。

「！し、仕掛け扉ですか！？」

「家の当主と召使しか知らない逃亡手段です。・・・ここから移動魔法を使います。さ、急いで下さいね」  
アキラはアレクサの手を取り、回転して行く床の上に導いた。  
重低音と共に、仕掛け扉は閉じる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2639c/>

---

Tear's Kissing ~ 湮滅のセレナーデ ~

2010年10月9日02時50分発行